

ひまわりからの メッセージ

175号

2026.7.13.

NPOひまわりの花内
西濃園域
発達障がい支援センター
発行人: 中野みみ子

今、考え中です。



西濃園域の園や学校に伺うと、先生方から「ひまわりからのメッセージは、いつ書かれるのですか。」「何故、手書きなのですか。」「よくたすねられます。」「きっと私はこたわりが強いんですよ。頑固ですし……」と答えながら、通信をいつから書き始めたのだろうか。ふと思ふことがあります。私が大垣市に奉職したのが二十五歳で、翌年から何らかの形で書いていますから、何十年ものこたわりです。でも、毎回何を書くのかと頭を悩ませてはいるのです。

皆さんは、考え事をなさる時、どんな方法をとられますか。私は昔から草取りをするか、教材作りをするかどうかでした。今はひまわりが少し弱ったので草取りは夫に頼んで、教材作りならぬ草木作りをしています。

実は、園域センターの仕事は、ひまわり学園在職中に

県から委託されてやっていたが、十年前にNPOを立ち上げる事になって、引きつづきセンターの仕事をやりつづけています。経営など無知な私のこと、事業主としての責務を担うことになろうとは全く考えてもいなかったのですが、人生ではじめて経験することが多々ありました。センター業務は県費でまかなえますが、備品や事務所代などは県費を使うことができません。困っている私たちを多くの方々が賛助会員として支えて下さってこの十年を乗り切ることができたのでした。

会員になって下さる皆さんに感謝しかありませんが、何かお返しできるものはないかと考えた結果、星野富弘さんの絵葉書をもうっていたことにしたのでした。そして、絵葉書が入っている封書の絵も何かに利用できないかと考えた末に、葉にすることにしました。絵を切り抜き、ラミネートするのはなかなか楽しいものです。さて、葉は出来上がりしましたが、メッセージの内容は頭の中でまだまとまっていません。仕方なく庭に出てみると、紅紫色の萩が目に入りました。酷暑の中でも植物はもう次の季節の準備をしているのです。

もしかすると、私たち人間だけが、今の楽しさだけを追求しているのかもしれないね。傍を猫がすり抜けて行きました。

発達障害がいはい

治すものですか？



発達障害者支援法ができた頃、学校で「支援が必要なのは六・四パーセントと言われていた。そして今は八・八パーセントだと聞く。通級指導を受ける子どもは教はほとんど増えて、支援級も増えている。

何故なの？ 発達障害児が増えたの？

授業中、席に坐ってられない。勝手にしゃべる。へやから出ていく。すぐに感情的になる。物にあたる。友だちとトラブルになる等々。先生方もお困りの様子です。私が「困っているのはこの子自身ですよ」と申し上げても「注意しても何度も同じことをするんです」「反省している様子は見られません」。等々とおっしゃるのです。さてどうしましょう？

「特性」とは何か？

岐阜県の障害福祉課の委託を受けて西濃圏域発達障害がい支援センターの仕事を始めてから、もう二十一年近くなります。その間、専門医である井川典克先

生を助言者に、ケース検討会を年六回開催してきました。井川先生は医師の立場からケースの助言をして下さいますし、特性、反応、症状ということに対して何度も説明して下さいたと思います。

「特性」は、いつでも、どこでも、誰の前でも起きるものだと言われます。多動症のお子さんは、いつでも、家庭でも学校でもショッピングセンターでも、どこでもよく動きます。特定の人の前だけ大人しくしているということはありません。誰の前でも多動の特性を見せてくれます。つまり、多動症の子が落ちつきなく、よく動くのは特性として当然のことです。想定内のことと言えそうですね。

ところが、学校にうかがうと、「去年まではこんなにひどくなかったのに、今年はとってむいどいのです」と訴えられることもあります。

多動症のお子さんに対して「きちんとさせなくてはいけない」と考えて、叱責が多くなると、どうなるでしょうか。井川先生のおっしゃる「反応」が出てきます。反応というのは、今までの特性とちがって来ます。いつでも、どこでも、誰の前でも起きていたことが、ある人の前では起きなくなります。そうすると、そのやり

方が肯定され、皆がその方法をとるべきだという意見が出て来ます。おそろく、自分の前では特性を見せなくなったことを、良くなったのだと解釈してその担任の先生は鼻にかかたで、次の担任にも自分のやり方をアドバイスされることになるでしょう。でも、残念ながら「特性」が「反応」に変化したのは良くなったのではなく、逆に、むしろ悪くなった状態と言わなければなりません。何故なら、特性が治ることはあり得ないからです。

さて、この「反応」の状態を良くなったのだと勘違いして、その方法を続けた場合、どうなるでしょうか。今度は、「症状」という状態になります。それは、いつでも、どこでも、誰の前でも悪態をつき、反抗的になり、「反抗挑戦性障害」と呼ばれるもの、いわゆる二次障害を引き起こします。これは明らかに人為的に作られた障害にほかなりません。

子どもの脳の発達を考える時、脳の可塑性が一番高いのは一歳までの乳児期です。その時期に脳へ栄養を与えなければ困ります。この時期の脳の栄養は、もちろんお母さんの胸に抱かれること、ことばかけをいばいしてもらって、赤ちゃん自身が発するサイン（笑顔や

声や体の動き、まなざし等々）に、きちんと反応を返してもらうことです。発語の基礎や社会性、共感の基礎もこの時に作られるのですから、赤ちゃん時代をもっと大事に考えないといけませんね。

そして、脳の成熟は、十歳十一歳頃と言われていて、発達障がいと言われる子ども達にも落ちつきが見えられ始めるはずで、でも、もしもその年齢になっても、前述したような反抗、自己否定などがあるとしたらそれ以前の接し方や指導に関して見直す必要があるかもしれません。家庭におけるルールの無さや放任、逆に厳しすぎるしつけも考え直さないといけないのかもしれません。

ところが、二次障害がひどくなったこの時期に必ずと言っていい程の確率で出てくるのが生徒指導です。その時期以前の「反応」の時期があたかも発達障害が治ったかのように受け取られて「もっと厳しくすれば良い」と言う人も出てきます。「わがままを許すべきではない。学校のきまりをきちんと身につけていくべきだ」という方針で進めようとされても、おそろく本人はもっと反抗的になっていくでしょう。発達障がいの子に生徒指導とは、もともと相容れないと言われています。

では、特性のある子は何でも受容して、その子の要求通りにさせていけば良いかというところ、もちろん、そうではありません。

まず、家庭での過ごし方をたずねてみましょう。家では何でも好き勝手にしてゲームやYouTubeで時間をすごしているようであれば、一つだけいいので親子でルールを決め、親もふんばってもらいましょう。発達障がいの子は、ゲーム依存になる確率は高いようです。

学校では、見通しをもたせるようにしましょう。何をしたいのか分からないことは不安になりますし、ことばからイメージを広げることも苦手なため、大人のことは具体的に端的にというのが基本です。だらだらと長い指示は全く聞けないでしょうし、見通しがもたないことは不安になります。「ちょっと待って」「早くして」「もしぐだったうー」等々、大人のあいまいなことばで不安になり、パニックから暴力になる子も意外に多いように思います。

信頼に裏打された優しさと厳しさを!!

二次障害になっている子は、大人を信じていないことが多いと思います。叱責が続き、自分を認めてもらう

いないと分かっているからです。そうすると、信頼をとり戻そうとして、何でも言うことを聞こうとする大人がいます。これも間違いです。聞けることと聞けないことがあるのは当然のことですから、大人は決して感情にならずに約束したことは譲らないことが大切だと思います。子育てには優しさと厳しさが必要です。二次障害になってしまった子の対応について大事なことは、学校と家庭が協力し合うこと、学校がチームとして機能することです。その子をどう育ていくのか、その子の特性の理解は当然ですが、何故こじれてしまったかという反省をもとに、学校全体で取り組んでいく必要があります。子どもは、信頼できる大人かどうかを見極める目を持っていますから、すぐに本質は見抜かれてしまいます。発達障害の子を皆と同じ枠に入れようとすると必ず失敗します。「想定内のことだね」と、おらかな見方も必要ですよ。

8月の予定

- 5日 ピアサポート
- 3・6・7日 養老町教育相談
- 8~9日 木村順先生研修会
- 17日 ひまわり学園研修5歳医療
- 18・19日 安ハ教育相談
- 19日 療育スタッフ研
- 20日 武田鉄郎先生研
- 24日 神戸たんぽぽ研
- 27日 安ハあすなろ研
- 26日 ケース検討会関ヶ原相談

※ センター親の会はありません。